

初の受難

「おうい、おうい」

自分を呼ぶような気がするので、蓮長は思わず足をとめた。

それだけでなく、別れたくはない思い出の山である。

師匠道善御房の温顔、

なつかしい兄弟子の顔、

この山道は二十年前には稚子まげ姿で、父親につれられて、出家得度するために登った道である。

しかるに今のわが身は、師匠から破門されて山を下りる身である。

「仏法を習い極めんと思わば、いとまあらずば叶うべからず。いとまあらんと思わば、父母師匠国主等に随いては叶うべからず。是非につけて出離の道をわきまえざらんほどは、父母師匠等の心に随うべからず」の気持である。

自分の破門は塔中住職の腹立ちまぎれの意志であろう。師たる道善御房は、破門というような重大なことを軽々に口にする筈がない。たとえ破門するにしても将来への戒めの言葉なども言いたかつたであろう。

がその暇もなく、早々立退くようにとの塔中住職からのきつい命令であった。

正午には持仏堂の講座に登って説法した身か四五時間後の今は、破門されて清澄山を下る身となつている。

「恩ヲステテ無為ニ入ルハ真実ノ報恩ノ者ナリ」

「悉達太子ハ浄飯大王ニ背キテ三界第一ノ孝子トナレリ」

口ずさみながら山を下りる自分であった。

言うべきことを言うべき場所で十分に述べ終つた。十二歳より三十二歳に至る二十年間、夢裡にも忘れたことのない干光山清澄寺において、仏法研鑽の極地を卒直に述べたのである。しかも師匠先輩の面前において堂々と発表したのである。蓮長狂せりと思う者もあるう、恐らく聴者中一人と雖も蓮長の言葉を首肯したものはあるまい。だがそれで結構である。

ただ仏恩を報ぜんがため、道善御房を導き奉らんがために、申し述べたまでである。

師匠道善御房にも理解ができなかつたであろう、ただその心田に、末法流布の法華經の題目を下種したのである。それだけでよい。今はそれ以上望むべくもないのだ。

「ばたばたと足音が近ずいてきた。」

「蓮長っ」

「おう……」

振り返ってみると兄弟子の義浄房が息せききつて立っていた。

「この道をいつてはならんぞ、危ぶない」

義浄房の言葉である。

「さては……」

と蓮長が義浄房の顔をみると、

「そうなんだ」

と義浄房がうなずきながら言葉が続けた。

「蓮長、敵もいるが味方もおるんじや。下僕が知らせてくれた。麓の辻堂に地頭の東条殿が、お手前の来るのを待ち構えておるといふのだ。この道を往つてはならぬぞ」

「法華経の為の難ならばこの蓮長が願うところです。御心配は有難いが……」

「何んにも言わずにこのわしに任せておきなさい。お主の考えは、おそらく、これから小湊に往つて、御両親に逢い、それからいずれかへ行こうと言う考えであろうが、それが最早かなわぬぞ」

「両親にも逢えぬとは」

「地頭の威力を軽くみてはならぬ。下僕の口ぶりでは小湊の御両親の家の方にも、それとなく捕方が手配してあるらしいという。それで浄頭房とも相談して、わしがあわてて追いかけてきたのだ。道はないが此処から崖を左に下りてゆけば裏道に出る、裏道の大きな柏の樹の許に、浄頭房が先にいってお手前のくるのを待っているのだ。そしてそこから西条の華房に出よう。西条は東条の領地外だからまさか東条左衛門も手は出せまいと思っている。地頭の東条左衛門は清澄寺の飼鹿と知りながらも、これを平気で射殺して従者にもつてゆかせると云う人間だ。

お寺参りに来るのか鹿狩りにくるのかわからんと言うやり方、今日来たのもお主の説法を聴きに来たのか、帰りの鹿狩りが目的なのかわかったものではない。そんな人間が今日はお主の説法でおこったのだから、どんなことを仕出かすかもわからない。鹿の代りに今日はお手前を射殺すと、麓の辻堂では待ち遠しくてその辺までもでばつてきておるかも知れん。浄頭房は、東条殿が今日持仏堂で抜刀せぬのは近頃殊勝事だと言つておつた。おやつ、麓の方から人声がきこえる、蓮長「こつちだこつちだ」

と義浄房が蓮長の法衣の袖を掴むが早いか、ころがり込むように、山の傾斜の灌木の木影に身をかくした。

義浄房は押しかくれた時の草の葉の動きに不安な眼をやりながら、ぢっと耳をすましました。

「山の一本道、この道しか通る所がないのだから、可哀想だが、あの坊主、逃がしっこはないぞ」

「先刻の知らせでは山を下りたと言うのにまだ来ぬのは不思議だ」

「地頭様のきつい御立腹、鹿の代りに今日は坊主を射とめてみせるといわれておったが、どうなることか」

と銘々に勝手なことを言いながら、山道を登っていくのだった。

「蓮長、聞いたか、今のは東条左衛門尉の従者たちだ。貴公が山を下るのがおそいので、さがしに来たのだろう。最早この道は危ぶなくて行けぬ。さあ、この崖を下りて裏道へ行こう、東条の領地外の華房の村へ行こう、浄願房も心配して待っているだろう。さあ、この崖を飛び下りろ」

そう言うとき浄房は先に立って崖を飛び下りた。

建長五年四月二十八日という、蓮長にとって大切な陽が今沈まうとしている時刻であった。

